

領域4 インフォーマルミーティング議事録

日時：2021年3月13日(水) 18:00~19:00

場所：日本物理学会 第76回年次大会（物性） オンライン開催（書記：秦、文責：小栗）

出席者（敬称略）

領域代表：小栗章、領域副代表：大岩顕、次期副代表：高根美武、

前代表：藤澤利正、前々代表：大槻東巳

運営委員：秦徳郎、高田真太郎、藤田高史、塩崎謙、植本光治、吉見龍太郎、井土 宏

次期運営委員：中村壮智、小布施秀明、武田健太

次々期運営委員（候補）：深澤太郎、井手上敏也

他

I. 報告事項

1-1. 物性領域プログラム小委員会・領域委員会報告（2020年11月26日：オンライン開催）

- 物性領域プログラム小委員会・領域委員会報告）物性領域では、招待講演5件、企画講演16件、チュートリアル6件、シンポジウム15件(内共催6件)が採択された。領域4からは秦徳郎氏および田中雅明氏の提案が採択された。
- 第76回年次大会のオンライン開催に関する旨の報告があった。
- 前回のオンライン開催に関する意見・感想、および年次大会におけるオンラインシステムの改善点について議論があった。
- 今後の大会の運営方針について、年間2回の大会のうち1回をオンライン開催とするなどの案を検討中である旨の説明があった。
- 講演の英語対応に関しての審議があった。

1-2. 領域4：若手奨励賞について、

応募者数、受賞者は次の通り：

2020年度 応募者数9名(実験:4名、理論:5名)

受賞者 川畑 幸平（東大理）、吉見 龍太郎（理研）

1-3. 領域4：学生優秀発表賞について

2020年秋季大会の実施状況の報告があった。

応募者数、受賞者は次の通り：

2020年秋 応募者数32名

受賞者 岩切秀一（阪大理）、小野寺桃子（東大生研）、渡邊光（京大理）

II. 審議事項

2-1. 来年度代表、副代表の紹介

次期領域代表 (2021.4 – 2022.3)

大岩 颯 (大阪大学 産業科学研究所)

次期領域副代表 (2021.4 – 2022.3)

高根 美武 (広島大学 大学院先進理工系科学研究科) の両氏が紹介された。

2-2. 運営委員の紹介、次々期運営委員の決定

次々期運営委員(2021.10 から 1年)が推薦・紹介され、承認された。

現役、次期、次々期運営委員の人員構成と任期は次の通り：

現役 (2020.4 – 2021.3)

秦 徳郎 (東工大) [量子ホール]

塩崎 謙 (京大理) [トポロジカル]

藤田高史 (大阪大) [量子ドット]

高田真太郎 (産総研) [半導体]

次々期 (2021.4 – 2022.3)

→ 中村壮智 (物性研) [量子ホール]

→ 小布施秀明 (北大) [トポロジカル]

→ 武田健太 (理研) [量子ドット]

(2021.4 から 3名体制に戻る)

現役 (2019.10 – 2020.9)

植本光治 (神戸大)[半導体]

井土 宏 (東北大)[グラフェン]

吉見龍太郎 (理研)[トポロジカル]

次期 (2020.10 – 2021.9)

→ 深澤太郎 (産総研) [半導体]

→ 岩崎拓哉 (物質・材料研究機構) [グラフェン]

→ 井手上敏也 (東大工) [トポロジカル]

2-3 運営委員の業務担当に関する報告 (今期 → 時期)

● 運営委員の連絡責任者

高田 真太郎 (産総研) → 吉見 龍太郎 (理研)

● 領域 4 HP 担当

塩崎 謙 (京大理) → 小布施 秀明 (北大)

● メーリングリスト・担当

藤田高史 (阪大) → 植本 光治 (神戸大)

● インフォーマルミーティング担当

秦 徳郎 (東工大) → 井土 宏 (東北大)

2-4 2021 年秋季大会 (2021.9) に向けたスケジュールに関する報告

● シンポジウム・企画講演等公募 4月～5月

● プログラム小委員会・領域委員会 5月下旬

● インフォーマルミーティング申し込み締切 6/11

● 一般講演申し込み締切 6/3

- プログラム編集会議 6月
- プログラム暫定版 web 公開 7月上旬。校正 7月中旬-7月下旬。
- 講演概要集原稿締切 (Web) 7/19
- プログラム掲載 8月中旬 (マイページにて PDF)
- 秋季大会 9/20~23 (東工大 大岡山キャンパス)

2-6 2021年秋季大会における領域別キーワードの追加と合同セッションの説明追加

- 第一キーワードに (9)「二次元物質」が追加されることが報告された。
- 募集要項が参照する「領域別キーワード」に記載されている合同セッションテーマ「半導体量子情報」を、同じく募集要項が参照する「合同セッションのある領域」に追記する方向で、領域1と調整中である旨の報告があった。

2-7 2021年秋季大会の招待・企画・チュートリアル・シンポジウムの申請

領域代表から、次回年次学会におけるシンポジウム・企画講演等の提案への呼びかけがあった。

2-8 学会講演の英語対応について

本件は2019年11月に開催された領域委員会から継続審議になっている事項。まず、領域代表から、2020年11月の領域委員会における議論に関して、以下の説明があった。領域4からは2020年9月のインフォーマルミーティングにて意見交換を行った際の概要を報告した。領域3,6,12からは、予めファイルが提出されより詳しい報告があった。さらに「学会発表スライドの英語化」について理事会から要請があり、議論の後、理事会から2020年12月中に修正案を提出し第76回年次大会の各領域のインフォーマルミーティング等で議論することになった。理事会提案の内容へ次の通り：

[理事会提案]

- 1) 留学生や外国人研究者の参加者への配慮
- 2) オンライン会議での海外からの参加者の可能性を広げる
- 3) 学生への教育などの観点から、
 - ・物理学会としては学会発表スライドの英語化を推奨する
 - ・将来的には概要集を英語で書くことも推奨する

理事会では、理事会提案にたいする各領域からの意見を聞いて、次回の秋季大会に向けて、何等かの方針を打ち出すことが予定されている。

領域代表からの以上の経緯説明のあと、本インフォーマルミーティングでは、理事会提案に関して自由討論を行った。以下、肯定的な意見と否定的な意見に分けてまとめる。

[意見交換]

肯定的な意見

- ・まず、スライドから英語化を試行するのは良いと思う。
- ・講演の英語化は、国内の外国人とのコミュニティーの発展に繋がる。
- ・例えば、年一回の学会は日本語講演で、もう一つは英語講演で行うことで、両者メリットを両立できる。
- ・学会の英語化推進で、外国人研究者と交流の機会が増えることは学生への教育にも良い。

否定的な意見

- ・英語化に伴い、まず日本語で論理をまとめ発表・議論する機会が少なくなってしまうことは、学生への教育という観点から、負の影響がでる。
- ・日本物理学会を英語化しなくても、学生は国際会議への参加をすることで、英語での議論の機会を得ることができる。
- ・英語化がハードルとなって、学生の講演数の減少などが生じる可能性がある。
- ・アメリカ物理学会がオンライン開催になったら、外国人研究者はそちらへの参加を選ぶ可能性があり、日本物理学会がオンライン開催し英語化を進めても海外からの参加者が増えることはないかもしれない。

その他の意見

- ・推奨化には反対しないが、目的をもっと具体性を持ってはっきりしてほしい。どこまでを目指すかが明確でないため、先が見えない。
 - ・スライドと概要集の英語化の後の対応、およびその後の展望が不明瞭。
 - ・発表が英語スライドかどうかを、プログラムに印をつけることで分かるようにしたほうが、外国人聴衆者にとってはわかりやすくよい。
 - ・推奨するという文言は実効性があるのか疑問。学生英語発表賞等を作るなどすることで、英語発表が増えるような対策をすると良いのではないか。
 - ・国内の外国人研究者の意見を聴取し、参考にすることはできないか。
 - ・オンライン開催よりも、対面開催の学会の英語化を進めた方が、日本に来たい外国人の増加を見込めるのではないか。
 - ・英語化の理由の 3 番目の「学生への教育の観点」に関しては、各大学等の現場との連携・調整が必要な事項で、しかも現場の温度差は非常に大きいと思われる。
 - ・スライドの英語化は反対しないが、予稿集の英語化は時期尚早ではないか。
- ・その他の意見があれば、メールで受け付ける (2021 年 3 月 22 日締切、宛先: jps-r4-chair-2020@googlegroups.com) ことにして終了。事務局へは、本日の議論およびメールをもとに、領域代表が 2021 年 3 月末までに領域 4 で挙げられた意見を報告する。

2-9. その他

特になし。

以上。